

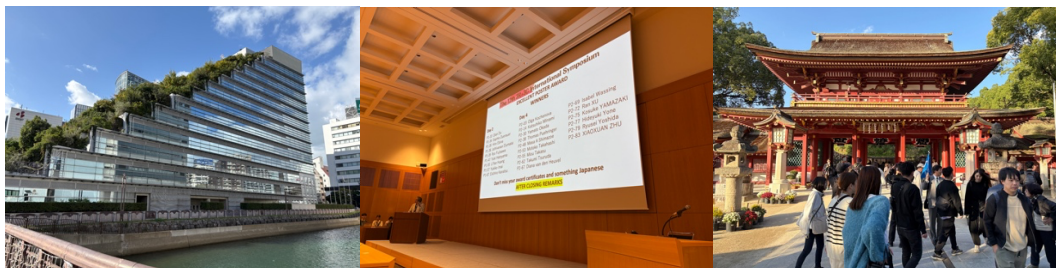
The 12th 3R+3C International Symposium 参加レポート

2024年11月18日(月)-22日(金)

A02-1 前島班：南克彦(遺伝研/総研大)

2024年11月18日から22日にかけて、アクロス福岡(福岡県)にて開催された「The 12th 3R+3C International Symposium」(ゲノムモダリティ協賛)に参加してまいりました(写真左、中央)。本学会では、DNA複製(Replication)・修復(Repair)・組換え(Recombination)およびクロマチン(Chromatin)・染色体(Chromosome)・細胞周期(Cell Cycle)に関するトピックについて、国内外から約250名の研究者が集い、熱い議論を交わしました。

会期初日はJohn Diffley博士(英 Francis Crick Institute)による基調講演で幕を開け、複製ライセンスと複製チェックポイント制御の分子機構について、美しい生化学実験に基づく講演がありました。続く5日間の会期中は、口頭演題74件・フラッシュトーク48件・ポスター演題164件を通じて活発な発表・質疑が行われました。本領域からは、西山先生・平野先生・前島先生・村山先生(昨年度まで)が登壇し、最新の研究成果を発表されました。長きにわたる研究によって複製・修復・組換えに必要な”役者(因子)”が出揃いつつある現在、3R+3C分野は新たな時代を迎えている印象を受けました。複製・修復・組換えの諸現象が相互にどう関連しあっているのか、またそれらがクロマチン・DNAの物性や構造とどう関わり合うのか、といった演題が注目を浴びており、ゲノムモダリティ分野の重要性を改めて認識いたしました。私も生細胞内でのユークロマチン・ヘテロクロマチンの動態についてポスター発表を行い、同分野の研究者のみならずDNA複製・修復研究の視点からも多くのフィードバックをいただきました。若手研究者として、国内外の第一線で活躍する研究者や気鋭の同世代と議論・交流(写真右)を交わすことができ、また「Excellent Poster Award」をいただき(写真中央)、大変刺激的な機会となりました。九州大・片山勉先生をはじめシンポジウムオーガナイザーの先生方、サポートの方々に深く感謝いたします。



写真(左からアクロス福岡、シンポジウム会場、太宰府天満宮へのエクスカーション
提供：前島一博先生)